
「海の生き物を守る会」メールマガジン No. 54

2010.2.1 (月)

うみひろも

Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今日の海の生き物」 コウボウムギ *Carex kobomugi*

砂浜海岸の後背地植生でもっとも海よりに見られる多年生の海岸植物。東アジアの海岸に



広く分布し、比較的疎な群落を作る。雌雄異株で、写真は雌株の花。4-6 ころに穂状の花を咲かせる。初夏から秋にかけては麦の穂によく似た種子の穂を形成する。葉鞘の繊維が枯れた後も地下に残り、筆の穂状の塊を作るため、フデクサともよばれ、これを書の弘法大師にたとえ、コウボウムギという名前がつけられた。不安定な砂浜に強靱な地下根を伸ばし、他の草本が生えられない厳しい環境に適応している。

(山口県光市虹ヶ浜にて 向井 宏撮影)

目次 「今月の海の生き物」 コウボウムギ

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 海の生き物を守る会の現在の活動と予定
3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介
5. 連載エッセイ（20）

「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている」 横濱康継

6. 事務局便り
7. 編集後記

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●カイギュウ類の新種 化石発見

ジュゴンやマナティの仲間、カイギュウ類の絶滅した新種の化石が、マダガスカル島で発見された。この新種はピグミーカイギュウの一種とされ、学名をエオテロイデス・ランボンドラーノ（*Eotheroides lambondrano*）と名付けられた。今回発見された化石は約4000万年前の頭蓋骨と肋骨。マダガスカルは8000万年前に大陸から離れたと言われており、哺乳類の化石記録は少ない。その中で、今回のカイギュウ類の新種発見はマダガスカルという場所の重要性が示唆されたと専門家は指摘している。

ピグミーカイギュウは、ジュゴンよりも小型のカイギュウ類で、陸上生活をしていた原始的な哺乳類から現在のカイギュウ類への進化の過程をつなぐ動物と言われており、今回の新種発見は、カイギュウ類の進化を考える上でも重要な発見といえよう。

【全国】

●水産資源と環境保全の研究会が発足

水産資源の持続的利用や養殖と海域環境の保全のために、いろんな分野の研究者が集い、知識の共有と情報を発信することを目指して、「水産資源・海域環境保全研究会」（社団法人）が発足した。会長には、横浜国立大学の松田裕之教授が就任。同研究会では、世界の水産資源や海域環境の保全に向けた科学的な研究成果を持ち寄り、成功する漁業を目指して議論するとともに、限りある海の恵みを持続的に利用する消費者の責任も問われねばならないとしており、研究者のみならず一般市民など関心ある人々の参加を呼びかけている。

【北海道】

●鉄鋼スラグで「藻場再生」 本当に必要なのか？

北海道の日本海側沿岸で発生している「磯焼け」の現状と対策を話し合う「北海道磯焼け対策連絡会議」が2009年7月に北海道水産林務部の主導で企業、自治体、団体によびかけて結成された。その会議が札幌で開かれ、新日本製鉄のスラグ・セメント事業部長が、鉄鋼スラグと廃材チップを混ぜたユニットを増毛町沖の海の中に沈めて藻場再生を行う実験の状況を報告した。実験の結果は、「鉄分がコンブの生育に大きく関わっている」とし、「単位面積あたりのコンブ重量が手を加えない地域に比べて220倍となった」と成功したと述べている。この実験以外にも、国内10ヶ所以上で同様な実験を行い、藻場造成効果があったとしている。

「磯焼け」とは、コンブやワカメなどの海藻が無くなり、サンゴモなどの堅い殻を持つ海藻が岩の表面を覆って、新たな海藻の着生が起こらない現象を指し、漁業に大きな影響を与えると問題になっている。その原因として、水温の上昇が主な原因と考えられているが、その他にも、ウニなどの藻類食の動物の影響や、栄養塩の不足など複合的な要因が考えられている。鉄分の不足が原因とする説は、最近主張され始めたが、その有力な証拠は無く、検証もされていない。鉄鋼スラグを海に入れて藻場を再生するという試みは、鉄鋼スラグの処分に困っていた鉄鋼業界を中心に注目を集めており、全国あちこちで試みが始まっているが、もともと鉄分不足が「磯焼け」の原因であるという確証もない上、鉄鋼スラグは十分な安全処理をしないと、もともと有毒成分を含有していたものであるし、海水中で有毒な物質に変化するという意見もある。今回の実験では、コンブの生育に有効であったとされているが、対照区が実験区のごく近くで行われていたり、実験の検証に疑問も多い。また、北海道日本海側での成功がそのまま日本各地の海で成功するという保証はない。鉄分が十分あるという海域でも同じような「成功例」が得られたとするなら、逆に鉄分補給が藻場再生とは関係ないという結果を示しているとも考えられる。安易に鉄鋼スラグを海に入れて実験することは止めるべきだ。もし有害だと分かったときには遅いのだから。

【東北】

●オットセイを「保護」？ 余計なお世話

1月15日頃から岩手県宮古市の田老川河口付近でキタオットセイ1頭が泳いでいるのが見つかった。このオットセイを1月19日に宮古市職員が捕獲し、宮城県松島町の松島水族館に「保護」した。

水族館の担当者によると、キタオットセイは比較的元気だという。宮古市水産課課長は「自分で海に帰る様子がないし、衰弱する怖れもあり、専門家に見せた方が良いと判断した」という。水族館では、飼育をしながら体力を回復させて、体調などを確認しながら自然復帰を目指す方向だとしているが、はたして野生動物をそこまですることが必要なのだ

ろうか。野生動物とペットを混同する人々が増えているが、専門家と相談するなら野生動物の専門家と相談すべきだろう（水族館の飼育員は飼育の専門家）。野生動物の専門家なら、そっとそのままにしておいてと指示するはずだ。余計なお世話は止めた方がいい。

【北陸】

●加茂湖で養殖カキ再開へ試験

昨年、赤潮の発生などで養殖カキが大量死した新潟県佐渡市の加茂湖で、養殖再開へ向けた種ガキ搬入試験が19日から始まった。加茂湖は、外海との水の交換が悪いため、水質に問題があり、ポンプによって海水を導入しながらカキ養殖を行っている。しかし、カキ養殖によって海底堆積物が汚れ、台風などによって海水が攪拌されると湖底の堆積物が浮上し、カキの大量死がしばしば起こってきた。昨年はさらにヘテロカプサという赤潮プランクトンが大量発生し、カキの斃死が相次いだ。全国のカキ養殖場では、程度の差はあれ、どこも同じような問題を抱えている。カキの養殖によって底質の悪化がカキ養殖そのものに悪影響を及ぼす、いわゆる自己中毒がカキ養殖の必然の道である。

●寒ブリ 記録的不漁続く

富山県は冬のブリ（寒ブリ）漁で有名だが、この冬はブリの水揚げが極端に落ち込み、年末12月は昨年の水揚げ（79トン）のわずか4%という記録的な不漁だった。今年になってもその傾向は変わらず、1月でも昨年の一割ほどに減少。この原因は不明で、富山県水産試験場では、昨年9月に出した豊漁の予報の手前、「原因は不明。今後盛り返す可能性は十分ある」としているが、今のところ回復の兆しはない。

●カキの出荷に打撃 七尾湾で異変？

石川県能登半島の七尾湾は、カキの養殖で有名な海であるが、この冬はカキの成長が悪く、出荷が激減しているという。原因は不明だが、昨年の冷夏が原因という説がある。石川県水産総合センターによると、例年だと七尾湾では夏に30度を超える水温が記録されるが、昨年は測定したどの地点も30℃を超えることはなかった。そのために、カキと餌を競合しているムラサキイガイやフジツボ類が水温上昇による夏の死亡が起こらず、カキの餌を採ってしまったために、カキが栄養不足となり成長が悪くなったというものだ。

金沢市中央卸売市場の月報によると、2004～2008年の5年間には12月に市場で熱かった石川県産カキは27000～40000kgだが、2009年12月は23800kgと減少している。しかし、業者によると「例年とまったく変わらない」という人もあり、場所などの微細な条件によって変化しているのかもしれない。

●福井の海岸にタイマイの死骸打ち上げ

ワシントン条約で取引が禁止されているウミガメの一種タイマイが死骸となって発見され

た。見つかったのは体長 20cm に満たないタイマイの幼体だった。タイマイは熱帯の海に生息する種で、甲羅の模様も美しく昔からべっ甲細工に使われてきたが、そのために個体数が減少し、絶滅のおそれ強い絶滅危惧種として国際的に保護されており、ワシントン条約で取引も禁止されている。幼体が発見されるのも珍しいが、日本海の海岸で発見されることも今までなかったことで、専門家の注目をひいている。発見したのは、福井県三里浜の砂浜で、地元博物館友の会の女性会員がビーチコーミング（漂流物採集）をしていて見つけた。

【東海】

●三島でウナギの資源守るサミット開催

静岡県三島市で、三島市内のうなぎ店の連合体「三島うなぎ横町町内会」の主催で、うなぎの資源保護を考える「うなぎまつりサミット in 三島」が三島商工会議所で開かれた。うなぎは太平洋の深海で産卵することが判明してきたが、プランクトン生活をした幼生が成長して川に上る。その河口を遡上するシラスウナギを捕獲して、うなぎの養殖を行っているが、年々シラスウナギが採れなくなり、国産ウナギの養殖も困難になってきている。そのために、うなぎ店の組織の代表らが集まって、業界全体で親ウナギ資源を保護していくことなどを、一般市民を交えて議論し、決議した。基調講演には、広瀬慶二（元日本栽培漁業協会参与）は、「資源保護のためには下りウナギ（天然の親ウナギ）を採らないことと、河川や沿岸の環境にこれ以上人為的な手を加えないこと」を強調、三島うなぎ横町町内会の関野会長は「下りウナギを使わないだけでなく、成育上の環境保全までわれわれうなぎ店が考える必要がある」と呼びかけ、伝統的な食文化であるうなぎ料理を存続させるためには、漁業規制と環境保全が必要と訴えた。

【近畿】

●クジラ食の太地住民に高濃度の水銀蓄積

北海道医療大学と第一薬科大学の研究班が、沿岸性のゴンドウクジラの肉を消費している和歌山県太地町の住民 50 人の毛髪に含まれる水銀を調べたところ、日本人の平均値濃度に比べても大きく上回り、約 10 倍の高い濃度があることが分かった。しかも、クジラの消費量と強い相関があることも分かった。クジラの肉に含まれる高濃度の水銀が原因とみられている。中には健康に影響がでてもおかしくないほどの高濃度の水銀が検出された人もいて、健康状態や汚染の実態について詳しい調査をする必要が指摘されている。鯨肉の消費を減らすべきだと調査した遠藤准教授は述べている。

●ホンコンイシガニ 和歌山県に初

和歌山県白浜町の網不知湾で、ワタリガニ科のホンコンイシガニが刺し網に掛かった。捕獲した漁業者が白浜町の京都大学白浜水族館に持ち込み、種名が判明した。甲羅の幅は約

8cm。ホンコンイシガニは、日本に棲むイシガニに近縁な種で主に熱帯地方に棲む。日本では西表島や奄美大島などで生息が知られていたが、近年は高知県浦戸の刺し網に掛かるようになり、大阪湾や浜名湖でも記録されている。和歌山県では、初めて確認された。温暖化に伴う熱帯種の北上の例と考えられる。

【中四国】

●上関原発止めよう！広島ネットワークが発足

今にも埋め立てが行われる可能性が高い上関原発予定地の長島田ノ浦の原発を止めるために、広島市の市民運動を行っている人たちが、お互いの運動を結び、効果的な運動を行うために、「上関原発止めよう！広島ネットワーク」を結成し、1月31日広島平和記念資料館で発足式を開き、中国電力による埋め立て・原発建設を止めさせるために、情報の共有や活動の相互協力をしようと誓い合った。

●14日に上関町で町議選挙 高島さんが立候補

2月14日（日）に上関町で町会議員の選挙が行われる。今回の選挙には、「長島の自然を守る会」の代表の高島美登里さんが防府市から上関町へ転居して立候補し、上関町に原発を建設させないよう活動するという意志を示している。前回の選挙では原発推進派が9名、反対派が5名を当選させたが、今回は定員が2名減となり12名。賛成派が10名、反対派が6名立候補し激戦となっている。上関原発の建設賛成の決議を覆すためには、反対派の全員当選が必要となる。

●祝島の漁民ら 補償金の受け取りを再び拒否

1月29日、上関漁協の祝島支部の漁民たちへ中国電力が2000年に漁業補償として支払った5億4千万円について、あらためて協議した結果、受け取りを拒否することを決めた。補償金10億8千万円のうち、2000年に中電から支払われた半金はただちに法務局に供託していたが、今年5月までに受け取らない場合は、国に没収されることになっている。昨年、中国電力が原発の建設申請を行ったことにより、残りの半金も上関漁協に支払われたが、祝島支部の漁民たちは、この受け取りも拒否している。

山口県水産部と上関漁協は、祝島支部の漁民たちに補償金を受け取らせるために、「受け取らなくても税金がかかる」「上関漁協が支払わねばならない税金の一部は祝島支部の漁民たちに支払わせる」というウソと脅しをかけてきていた。29日の祝島支部の総会では、5月に国に没収されることになっている5億4千万円を受け取るかどうか議論され、挙手採決の結果、23名が受け取りに賛成、43名が反対で、ふたたび受け取りを拒否した。その結果、中国電力からの補償金は国に没収されることになった。しかし、山口県や漁協幹部が脅した税金については、受け取っていない補償金の税金を支払う必要はないというのが、国税当局の見解だ。

祝島支部の漁民たちが、あくまで漁業補償金を受け取らない以上、中国電力は地元の合意を得たことにはならず、このままでは地元の合意を得ることを条件としている国の原子炉設置審査で原発建設許可は得られないことになるだろう。

●漁業規制強化を 萩市長らが要望

山口県萩市の野村市長や山口県漁協の田中組合長らが、農林副大臣要望書を手渡し、山口県日本海海域のクロマグロなどの漁業資源保全のための漁業規制の強化などを訴えた。要望書には、(1) クロマグロの乱獲規制や産卵保護などの資源管理対策を推進すること、(2) 大中型巻き網操業禁止区域の拡大、(3) 指定漁業へ VMS (船舶位置管理システム) を導入し、漁業の取り締まり体制を強化すること、などが書かれている。市長らはクロマグロの天然資源が萩市見島周辺からいなくなり、枯渇していると危惧を表明、八里が瀬海域などで実施されている巻き網漁業の自主規制を公的な規制にするよう求めている。

これに対して山田農水副大臣は、政府として VMS 導入を考えていることを明らかにし、「巻き網漁船や底曳き網漁船に VMS をつけてもらえば、違反操業かどうかはすぐ分かり、海難防止にもつながる」とした上で、「来年度から予算要求やシステム開発をやろうと考えている。できれば 2012 年度から VMS の義務化をしたい」と話した。

●山陰海岸ジオパーク鳥取県連絡協が発足

山陰海岸ジオパーク (地質公園) を世界のジオパークネットワークに加盟させることを目指した「山陰海岸ジオパーク鳥取県連絡協議会」が鳥取市の呼びかけで 1 月 25 日に発足した。鳥取県内の自治体や経済団体など 10 団体が結成したもので、今後、啓発活動や世界ジオパークへの加盟推進に取り組む。設立総会では、山陰海岸ジオパークの知名度がまだまだ低いことを指摘する声もあがり、今後連携を取りながら、より充実した取り組みを目指す。

【九州】

●諫早干拓調整池の排水とめろ 漁業者ら要求

諫早湾の潮受け堤防の建設と干潟埋め立てが、有明海の生態系に大きな影響を与えているが、潮受け堤防内側の調整池から淡水が有明海に排水されることにより、ノリの生育が悪くなったとして、佐賀県のノリ養殖業者ら約 300 人が 1 月 7 日、漁船約 100 隻を仕立てて有明海で海上抗議デモを行った。この冬はノリの色落ち被害が広がっており、2001 年の大規模被害以来の大規模な抗議が行われた。潮受け堤防の水門を開放するよう要求されている一方で、調整池の水質汚染防止のために水門を一部適宜開けて調整地の水を流していることが有明海に悪い影響を出していると批判されている。潮受け堤防という環境破壊を行えば、なにをどうやっても環境への悪影響は避けられないことは当然のことだが、それを読めない農水省の失政のツケはいつまでも続く。

佐賀県によると、同県西南部沿岸では昨年末から、ノリの生育に必要な栄養塩を摂取するプランクトンが異常に増えた結果、養殖場の栄養塩が急速に減ってしまい、ノリが色落ちしたという。佐賀県のノリ網業者は、今年の網の張り込みが進んでいないと語った。予定の2~3割がまだノリ網を張れていないという。

●ノリの色落ちで緊急ダム放流 大雨で結局中止

有明海の養殖ノリの色落ち被害が出ていることで、佐賀県有明海漁協などが国交省九州整備局に筑後川上流のダム放流を要請した。国交省は要請を受けて、松原・下笠ダムの緊急放流を28日から行うことを決めた。28日から2月2日までの6日間、筑後川の筑後大堰の最低流量を毎秒40トンから段階的に45トンまで上げることとした。緊急放流は、栄養塩を含んだ河川からの流量を増やして、ノリの色落ち被害を防止するのが目的。佐賀、長崎の両県漁協から要望が出ていた。

ところが、27日に降雨があり、国交省九州整備局は筑後川の流量が十分確保されているとして、緊急放流を中止した。前日の雨で筑後川の流量は毎秒90トンに増加していた。今後は流量の推移を見ながら、放流するかどうかを決めるという。

●白いナマコ 鹿児島と岩国で発見

鹿児島市の桜島沖で、白いマナマコが発見された。突然変異によって色素を作る能力が欠如したものとみられる。

一方、岩国市日ノ出町の沖合でも白いナマコが捕獲された。体長14cmのマナマコと同定された。

●大村湾でスナメリの死骸発見

長崎県西海市の大村湾で、小型鯨類のスナメリの死骸が見つかった。スナメリは水産庁の水産生物レッドデータブックで絶滅危惧種に指定されている内海性のクジラで、鯨類ではもっとも小型とされている。日本では、仙台湾から有明海まで広い範囲に生息していたが、各地で激減、三河湾、瀬戸内海などに多く生息している。

長崎県によると大村湾には約300頭が生息しており、2009年の一年間で5頭が死体で見つかっている。今回見つかったスナメリは、体長118cm、体重約30kgの雄で、水深10mの場所に仕掛けた刺し網に絡まって死んでいた。

【沖縄】

●米軍基地の辺野古移転に反対する 新名護市長

米軍の普天間飛行場の移転先として自民党政権で日米合意されていた辺野古を抱える名護市の市長選挙が行われ、辺野古への移転に反対する稲嶺進候補が移転容認派の島袋候補を抑えて当選した。これで新政権の選択肢から辺野古移転は無くなったと言っても良いだろう

う。鳩山首相はゼロベースを強調して辺野古も選択肢に残すことを暗示しているが、沖縄の人たちはもはやそれを許さない。普天間基地を抱える宜野湾市長が指摘しているように、米軍は海兵隊をグアムに集中させる再編計画を実行に移しており、沖縄には海兵隊が世界に侵略するときに自由に使える場所を確保しておきたいと思っているだけなのだから、そのためにジュゴンやアオサンゴなど沖縄でも貴重になった生態系の残る辺野古・大浦湾に基地を新しく作るべきではない。新しく名護市長となった稲嶺氏は、選挙中に約束した辺野古に基地を作らせないという信念を貫くと述べており、辺野古の海が守られる希望が見えてきた。

2. 海の生き物を守る会 現在の活動と予定

全国の砂浜海岸生物調査にご協力下さい

多くの方が、多くの海岸でこの調査に参加していただけるようお願いいたします。ご協力いただける方には、方法と調査報告用紙をメールでお送りいたします。当会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> にも掲載しています。

これまでに会員や非会員のみなさまから寄せられた調査票は58枚、全国37ヶ所の砂浜で調査が行われました。全国の砂浜調査にするには、まだまだ多くの海岸で調査が必要です。最低各県で2-3ヶ所の砂浜を調査し、全国で100ヶ所以上を目指しています。ぜひともみなさまのご協力をお願いします。これまで調査された砂浜の都道府県は以下の通りです。

北海道、青森県、神奈川県、千葉県、三重県、和歌山県、福井県、京都府、大阪府、兵庫県、香川県、徳島県、高知県、山口県、福岡県、沖縄県

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●第7回サイエンスフォーラム(旧称サテライトシンポジウム)

「音と光で知る海獣類」

海獣類の生態や能力について「音」と「光」(視覚)を通して理解することを趣旨とし、特別講演として、海の王者シャチの飼育とトレーニングに関する魅力の話を鴨川シーワールドの金野征記氏に、また、美しくも厳しい海と生命の物語の映画「オーシャンズ」(1月22日公開)に、佐渡の「弁慶」という名前のコブダイの映像で日本からただひとり映画に参加

している奥村康氏にも講演していただきます。

・と き：2010年2月28日(日)10:30-16:00

・と ころ：東京大学 弥生講堂 一条ホール（東京都文京区弥生 1-1-1, 東大農学部構内）

地下鉄南北線「東大前」下車1分, 千代田線「根津」下車徒歩約8分

※地図は <http://www.a.u-tokyo.ac.jp/yayoi/>

<一般講演>

10:40-11:10 ガンジスカワイルカは濁った水中でどのような行動をしているか-イルカ類の音響観測- 杉松治美（東京大学）

11:10-11:40 野生イルカの鳴音と行動 中原史生（常磐大学）

11:40-12:10 セイウチの音声弁別行動について-セイウチはヒトの言葉が聞き分けられるか!? 芦刈治将（鳥羽水族館）

13:10-13:30 イルカも錯覚をおこす!? 村山 司（東海大学）

<特別講演>

13:30-14:10 シャチの飼育とトレーニング 金野征記（鴨川シーワールド）

14:10-14:50 一瞬をとらえる！-海洋ドキュメンタリー撮影裏話 奥村 康（日本水中映像）

15:00-15:40 講演者・水族館と語ろう

○申し込み方法

・参加費：1000円...当日, 会場にて お支払いください。

・下記まで メールにて お申込みください（「フォーラム参加」と明記し, 氏名, 所属, 連絡のつく電話番号）。 ※携帯電話のメールからもお申込みできます。

・受付番号を yahoo からのメールにて送信します。その番号を, 当日会場でお申し出下さい。

なお, 受信拒否されている場合は受付番号を交付できないため, 受付できません

★申込み先アドレス acad-marine@ml.tokai-u.jp

※締め切り：2月25日17:00必着（定員220名になり次第, 締め切ります。当日申込みは ありません。）

なお, 同じものが, <http://www.scc.u-tokai.ac.jp/ocean/oe/2010.pdf> にもあります。

●ダイビングフェスティバル出展&造礁サンゴ調査と保全セミナー

～市民ダイバーが参加できる造礁サンゴ調査とモニタリング～

OWSは、今年も恒例「ダイビングフェスティバル 2010」にブース出展します。今年は、サンゴ礁保全に向けた一般来場者向けのセミナー「北限域の造礁サンゴ分布調査におけるOWSの取り組み」を以下の内容で開催することになりました。ダイバーの方に限らず是非、ご来場・ご参加ください。

フェスティバル開催期間 2月12日（金）～14日（日）

【以下セミナーについて】

タイトル 造礁サンゴ調査と保全セミナー

～市民ダイバーが参加できる造礁サンゴ調査とモニタリング～

講師 中井達郎（国士舘大学非常勤講師）

司会：浪崎直子（国立環境研究所／OWS 研究員）

開催日 2月13日（土）11：00～12：00

会場 東京ビッグサイト西4ホール フェスティバル付帯会議室・ルームA

参加費 無料

定員 50名（当日受付・先着順）

主催 日本スクーバ協会 DF 実行委員会 <http://www.scuba.or.jp/>

協力 特定非営利活動法人 OWS

●第7回汽水域セミナー

日時：2月6日（土）13:00～17:00（12:30 開場）

場所：神奈川近代文学館 横浜市中区山手町110 電話 045-622-6666

交通 みなとみらい線 元町中華街下車徒歩8分 市バス（11番）桜木町一保土ヶ谷・（20番）山手駅一山下埠頭 <http://www.kanabun.or.jp/Og20.html>

会費：無料

■開催主旨

東京湾の干潟は、徳川幕府の江戸入府から現在に至るまで埋め立てられ続けてきました。それでも黒船来航以前の横浜村は、漁村や塩田が点在した自然が残るのどかな村でしたが、明治維新になるとお台場の築造、港湾施設の建設、居留地や都市の建設のために、山が崩され、運河が掘られて、大々的に干潟が埋め立てられていきました。戦後昭和30年頃の横浜は、本牧から磯子・金沢八景にかけては干潟が残された自然豊かな海でしたが、昭和30年後半からの30年間であらかたの干潟は埋め立てられ、港港湾施設や工場用地となってしまうしました。

私達は、横浜に残っている野島周辺の干潟や塩性湿地の貴重さを、市民や住民の方々に認識していただき、地域の人々を中心にしたパートナーシップの輪を広げて、東京湾の環境保全及び環境再生に向けた活動の一翼を担いたいと考えています。

このセミナーでは、様々な人々が同じレベルで横浜の古き良き時代の環境や、埋立の歴史・野島水路の歴史、現在の野島の自然等についての知識を持ち、東京湾の汽水域環境の改善の具体的な行動に結びつけて行く事を目的としています。

■プログラム

13:00ー 1. 開会挨拶 杉山 恵一（富士常葉大学教授・自然環境復元協会理事長）

13:30ー 2. 基調講演 "東京湾の塩性湿地 "

古川 恵太（国土交通省国土技術施策総合研究所海洋環境研究室長）

14:10ー 3. 講演

- 14:10ー 1) 漁師が見た横浜の海 落合 稔 (有限会社落合産業)
15:05ー 2) 横浜港の埋立の歴史と野島水路の近代史 田中 常義 (堀割川魅力づくり実行委員会)
15:45ー 3) 野島の干潟に集う野鳥 奥津 敏郎 (日本野鳥の会 会員)
16:25ー 4) 野島のヨシ原の現状 渡辺 彰 (NPO 法人よこはま水辺環境研究会)
16:50ー 4. 閉会挨拶 小泉 信三 (NPO 法人よこはま水辺環境研究会理事長)
17:30ー ・ 会費制交流会 自由参加 (会費 3,000 円程度を予定)
主催 : 汽水域セミナー実行委員会 後援 : 神奈川県・横浜市

■参加申し込み 当日受付も行いますが、参加人数把握のため、出来るだけ事前に申し込みをお願いします。メールアドレス : hayashi_y@shimz.co.jp

【中四国】

●ラムサール条約と賢明な利用を語る会 14

テーマ : 宍道湖・中海における人と鳥との共生

今回の語る会は「人と鳥との共生」をテーマに開催します。ハクチョウ、ガン、カモなど冬鳥の飛来地として本州最初のラムサール条約湿地に指定された宮城県の伊豆沼・内沼から講師をお招きし「マガンによる農作物被害」への先駆的な対応について講演していただきます。また、松江市の鳥類による農作物被害についてや、ブランド米「宍道湖湖北はくちょう米」づくりについての事例報告をいただきます。

講演後には、参加者のみなさまが宍道湖・中海における人と鳥との共生について、意見や情報の交換を行います。

開催内容

1. 講演 : ガン類による麦類の採食ー宮城県北部における事例解析と対策ー
(財) 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 主任研究員 嶋田哲郎氏
2. 報告 :
 - 1) 松江市における鳥類による農業被害の現状 松江市産業経済部農林課 本田智和
 - 2) 湖北はくちょう米の取り組みについて ラムサール田んぼの会 代表 高橋裕典
3. 意見交換会 : 宍道湖・中海における人と鳥との共生

日時 : 2月13日(土) 13:00~15:30 (受付開始 12:30)

会場 : 宍道湖自然館ゴビウス レクチャールーム

定員 : 40名 (参加無料 ; 事前申し込みをお願いします)

お申し込み (お問い合わせ) 先 : 島根県立宍道湖自然館ゴビウス

TEL (0853) 63-7113 FAX (0853) 63-7101 E-Mail: gobius@gobius.jp

※参加希望の方は、住所、氏名、電話番号をお知らせください。

主催 : ●島根県 (環境生活部自然環境課)

<http://www.pref.shimane.lg.jp/environment/nature/shizen/ramsar/>

- (財) ホンザキグリーン財団 <http://www.green-f.or.jp/>
- 島根県立宍道湖自然館ゴビウス <http://www.gobius.jp/top.htm>

●らんぼうの「祝島とアフリカから見えること」

祝島とアフリカから 見えること



山口県南東部に位置するハート型の祝島。
上関原発問題に揺れるこの島で紅のカヤック隊に参加し、祝島島民と共に暮らした中から見える自然と共に育立した生き方。
そして、アフリカはケニアで体験した伝統的な暮らしを続けるマサイ、ドゥルマの人々。
貧困問題を抱えるキベラスラムの人々などなど。らんぼうが現地での暮らしを道し感じた事を皆さんにシェアします。

2010年2月6日(土) 18:30～

身元者：らんぼう(上田直樹) 北海道札幌出身。山口県在住。27歳。らんぼうの代表。 上関原発を考える山口若衆(わかいし)の会共同代表。 2005年地球一冊を経験。 現在はスタディロードという体験学習型ツアーを山口県やケニアで主宰している。	下関市民活動センター 大会議室 下関市竹崎町4-2-2ブルタワー下2F 入場無料 主催：チームビジュアライズ (083-250-5180：株式会社FEEL内) 協賛：オフィス アッシュ 株式会社セキラン タウン情報下関 協力：しものせき未来人ネットワーク
---	---

上関原発を考える若衆(わかいし)の会の共同代表をつとめるらんぼうが祝島とアフリカのケニアで体験した伝統的な暮らしに生きる人々の生活から、上関原発問題を考える。

とき：2010年2月6日(土) 18:30～

ところ：下関市民活動センター 大会議室

料金：無料

主催：チームビジュアライズ

【九州】

●第2回 宮崎の海岸シンポジウム

【砂浜保全のために何ができるのか】

日時： 2010年2月6日(土) 午後1時半開始 午後5時終了

場所： 宮崎市民プラザ 4階大会議室

参加費：500円(資料代を含む)

定員： 90名(先着順)

プログラム

- ・ 講演1 宮崎海岸で行なわれている侵食対策
小澤盛生(国土交通省宮崎河川国道事務所海岸課)
- ・ 講演2 海岸工学の立場からみた宮崎の侵食対策
村上啓介(宮崎大学工学部)
- ・ 講演3 青森県大畑町における森川海の保全と護岸撤去
角本孝夫(NPO サステイナブルコミュニティ総合研究所)
- ・ 講演4 環境保全を必要とする地域に生活する人の権利
籠橋隆明(名古屋E&J法律事務所)
- ・ 総合討論「宮崎の海岸を保全するための第一歩は？」
パネラー 上記講演者4名
コーディネータ 林裕美子

主催：ひむかの砂浜復元ネットワーク・住吉海岸を守る会

問合せ先： 0985-50-4650 (林)

【沖縄】

● 博物館企画展 「造礁サンゴ - 楽園をつくった偉大な建築家 - 」

[会場]沖縄県立博物館・美術館 3階 博物館企画展示室

[会期]平成22年2月5日(金)～3月14日(日)

[観覧料]一般300円(240円)、高大200円(160円)、小中100円(80円)

※カッコ内は20人以上の団体料金

エメラルドグリーンの美しいサンゴ礁の海は、私たちがすがすがしい気分にさせてくれます。また、一度でもサンゴ礁の海に潜ったことのある人は、透明できれいな水に強い印象を受けたことでしょう。

サンゴ礁をとりまく海水が透明なのは、じつは漂っている有機物が少なく、植物プランクトンなどもきわめて少ないからです。生き物たちにとって食べ物が多いようにみえないサンゴ礁が、色とりどりの魚たちをはじめとした多様な生きものたちを支え、まさに「楽園」のような世界になったのはどうしてでしょうか。サンゴ礁の島々で、私たちの祖先は身近な素材としてサンゴやサンゴ礁の生きものたち、またサンゴに由来する石灰岩など、さまざまなものをくらしのなかに活かしてきました。またサンゴ礁の海は、今の時代でも私たちのさまざまな文化に大きな影響をおよぼしています。ところが、サンゴというと「宝石サンゴ」を思いうかべる人のほうが多いことは、サンゴ礁やそれをつくりあげた造礁サンゴについては実はあまり知られていないということを物語っています。

近年、沖縄のサンゴ礁は、埋め立て、赤土流入、オニヒトデによる捕食、白化や病気などさまざまな理由で危機に瀕しています。森が丸裸になったように、海のなかにサンゴの墓場のような場所があっても、陸上でくらししている私たちはなかなかそれに気づくことができません。私たちにとってかけがえのないサンゴ礁を未来へ残すためにどうすればよいのでしょうか。それを皆で考える機会となればと願い、この展示会を企画しました。

この展示会では、造礁サンゴが体のなかに宿した藻類の力を借りて、サンゴ礁という、時には巨大な構築物をつくりあげるということを柱に、100数十点の骨格標本、精巧につくられたサンゴ礁地形模型、生きたサンゴやその仲間たちのアクアリウム、わかりやすい解説パネルや子どもたちの体験コーナーなど、さまざまな展示物を通して、造礁サンゴの生きものとしての興味深い特徴や生態系のなかでの役割、人のくらしとの関わり、造形としての面白さなど、さまざまな側面から造礁サンゴを取り上げます。さらに、沖縄のサンゴ礁の現状や保全に向けた取り組みについては、展示だけではなく、関連催事である講演会やシンポジウムでさらに詳しくお伝えします。展示会とともに、講演会やシンポジウムにもぜひ足を運んでいただければと思います。

2/9-2/14 写真展@県立博物館（県民ギャラリー）

【開催期間】2010年2月9日（火）～2010年2月14日（日）

【会場】沖縄県立博物館 県民ギャラリー3

4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

●「中国電力さん！瀬戸内海の海水温度を2℃あげますか？ 生き物のつながりを断ち切りますか？」月刊「むすぶ -自治・ひと・暮らし-」No.468, pp.6-24 ロシナンテ社（2010）¥840

1月10日に、日本生態学会自然保護専門委員会、日本鳥学会鳥類保護委員会、日本ベントス学会自然環境保全委員会が広島市平和公園国際会議場において合同で開いたシンポジウム「上関 瀬戸内海の豊かな自然が残る最後の場所」の報告が、この雑誌に収録された。3学会の要望書なども資料として収録されている。ちなみにこのシンポジウムには500人が集まり、大成功の内に終わった。中国電力の社長もさすがに無視できなくなり、反論を出さざるを得なくなったと報道された。

5. 連載エッセイ(20:最終回)

自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている？—

横濱康継(南三陸町自然環境活用センター長)

第五章 いのちについて

ヒトという悲の器

ヒトは、約七〇〇万年前にチンパンジーやボノボとの共通祖先から分かれたとされている。それは、西アフリカの密林に住んでいた類人猿のうちの一群が争いに敗れて乾燥地帯へ逃げ出した、という形で始まったとも言われる。その群の七〇〇万年後の子孫は個体数が六〇億以上に増え、そして「地球を支配した」などと思いつく個体まで現れるようになった。

現在の人類にとって、人口問題は地球環境破壊に劣らぬほどに深刻な問題である。地球

環境破壊のおもな責任はいわゆる先進国にあるが、人口増加は発展途上国でとどまるところを知らぬ勢いで進行している。

豊かな時代に住む私達は、貧しいと子は育てられないのではないかと思ってしまうが、実際には貧困なほど多産になるらしい。また子を沢山育てておかないと老後が不安だから避妊しない、という事情もあるという。

今よりはるかに豊かでなかった時代の日本でも、老後の面倒を見てくれる子供は沢山居たほうがよい、という感覚は一般的だったようである。安全な避妊も可能になった今日でも、老後の保障のために子を沢山産んでおく、などという行為が横行しているとしたら、親は我が子のいのちをあまりにも軽んじていることになる。

子は両親の衝動的な行為の結果として生まれるということは、だれでも知っているが、「子を授かった」などと言う。確かに子が生まれた瞬間、産んだ当事者であるはずの両親でさえ「授かった」と「実感」してしまう。私もそのような経験の持ち主だが、我が子があまりにも愛らしかつたために、何かに感謝したくなったのだろう。しかし複雑なはたらきを持つようになったヒトという動物の脳は、「愛の対象となるべき授かりもの」を「老後を保障してくれる授かりもの」へすり替えるという離れ技を演ずるようになった。そして「親孝行」などという奇妙な観念や「子孫繁栄」などという社会通念まで産み出してしまった。

我が国の最重要施策のひとつになった「少子化対策」も、国家的打算からの「授かりもの増産計画」と言えるが、太平洋戦争開戦前から「産めよ増やせよ」のかけ声とともに押し進められた「消耗品としての兵士増産計画」と似た臭みがある。

ヒトに最も近縁なチンパンジーやボノボでさえ、子を産もうなどとは全く思わずに、おそらく愛情を伴った純粋に衝動的な生殖行為を行い、その結果として子が生まれる。そしてチンパンジーやボノボの親達は、子を老後の保障や群れの勢力拡大に利用しようなどという下心も抱かない。

生殖行為によって子が生まれるということをヒトは知るようになるにつれて、愛情の純粋な発露であった生殖行為が打算で汚されるようになったのである。

我が子があまりにも愛らしいという理由からであれ、老後を保障してくれる宝物のような存在と認識したためであれ、「授かった」という感謝の気持ちは何かに向けられているはずである。その「何か」とは、天か神かということになるのだろう。個人あるいは国家の打算的立場からであっても、子を産むことは天か神からの「尊い授かりもの」を産むことだという共通理解のもとに、善と判定されることになる。しかしヒトは死にたくないと意識する唯一の生物でありながら死を免れない。子を産むとは、それほどに哀れな存在を増やすことなのだから、善どころか犯罪に等しい悪であると私は判定したい。もし子が天か神からの「授かりもの」であるとすれば、天や神はよほどの意地悪ということになる。

私達が属するヒトという種類そのものも「天か神の意地悪」の産物と考えたくなる。ヒトはチンパンジーなどに比べても、喜怒哀楽の情も思考力や記憶力も飛躍的に大きいのだ

が、困ったことに、嬉しかったことより、悲しかったことのほうが、はるかに強く長く心に残る、という傾向がある。とくに子や孫を失った悲しみなどは一生薄れることがないだろう。チンパンジーなども、子を失った瞬間は悲しむのだろうが、それも永続しきそうにない。そして他の親の子の死を目撃しても、同情したり我が子の死を予想して怯えたりすることもないだろう。

ヒトという生物を特徴づける言葉としては「悲」を第一に挙げるべきだろう。高橋和巳（一九三一～一九七一）という若くして世を去った小説家に「悲の器」という作品がある。彼の作品のうちの何篇かを読んでいた頃の私は、まだ四〇歳そこそこだったせいか、「悲の器」が何を意味しているのかよくわからなかった。それから三〇年ほどを経た今頃になって、「ヒトという生き物」のことだったのかと気付いた。

ヒトはまさに「悲の器」つまり「悲しみの入れ物」なのである。約七〇〇万年前に私達の祖先は「悲の器」への道を歩み始めたわけだが、このような進化も天か神の仕業であるとしたら、やはり天や神はよほどの意地悪であるとしか言いようがない。

それは神が私達に与えた試練であるという考え方もあるようだが、何のための試練なのだろうか。試練に耐えれば何かを得られるということなのだろうが、あらゆる悲しみに耐えた者に約束されるのは、死後の世界での指定席という、私のような疑い深い人間にとっては、空手形に類するものでしかない。

諦め

天や神の仕業であるかないかは別にしても、「悲の器」であるヒトという生物の六〇億以上の個体が地球上に住んでいるということは厳然たる事実であり、そのほとんどは毎日新たな悲しみをそれぞれの心に積み重ねながら生きている。

人生に目的はないのだが、やはりつい「私達は何のために生きているのだろう」と思ってしまう。仮に「ために」という表現が許されるなら、「ヒトは悲しむために生まれた」と私は思いたくなるのだが、世の中には「自分は楽しむために生まれた」と思い込む「快樂の器」も多く存在してきたようである。かつての専制君主や貴族の多くがその該当者と言えるだろうが、近過去にも現代にも好例は見出せる。

制度上の独裁者やその周辺ばかりでなく、民主主義を掲げた国の事実上の支配者の多くも「快樂の器」達なのだが、彼等が自分の器へ盛るべき「快樂」を生産するたびに、必ず排出される大量の「悲」が国内外の民衆の心に積み重ねられることになる。世界をより平和にするとは、世界中の「悲」の排出量を減らすことである、と極言できるだろう。そのためには、世界中の「快樂の器」達に、ヒトは本来「悲の器」である、と悟らせなければならない。

私達一般民衆も、「悲の器」であると自覚するのは辛いため、「快樂の器」を志向しがちである。一方権力者達は、「労働力」たる民衆に生きていてもらわなければ困るので、このような民衆の志向を助長しながら巧みに利用する。しかし権力を持たない私達の器には、

わずかな「快樂」を埋め尽くしてしまうほどに大量の「悲」が積み重なってしまうのである。近年加速している若年者犯罰の増加も、「快樂」を盛れると思っていた器に「悲」ばかりが多く積み重なる、という現実への不満が大きな要因になっていると言えないだろうか。

思春期の頃に、自分が「悲の器」として生まれたと知れば、衝撃を受け、大きな不満を抱き、自分を産んだ両親を恨むかもしれないが、親も同じようにして生まれた「悲の器」なのであり、やがて自分も新たな「悲の器」を産まなければならない、ということに気付けば諦めざるを得ない。

自然界に生きるさまざまな生物を観察すれば、すべての生物の中で「哀れ」を知るのはヒトだけであるということがわかる。だからヒトは特別な存在であるというような特権意識を持つ人物も多いが、むしろ「哀れ」を知るヒトは最も哀れな生物であると言える。

チンパンジーやボノボは、ヒトに最も近いのだが、深く悩んだり自殺したりすることはない。なぜ私達の祖先は、七〇〇万年前に彼等と袂を分かって、「悲の器」への道を歩んでしまったのかと、恨めしくさえ思えるのだが、これこそ「天の決めたこと」とも言える。

今日の「天」の概念は、三〇〇〇年前頃の中国における商（殷）王朝から周王朝への交代期に形成されたらしい。多くの人の神のイメージより抽象的であり、例えば、約一四〇億年前のビッグバンという宇宙の始まりも天によって引き起こされたと言っても、あまり違和感はない。

現生人類の平均的頭脳の持主であるはずの私には、なぜビッグバンが起きたかということをはじめ、ビッグバン以前には時間も空間も存在しなかったという話、そして未来へ向けての時間の長さとしての、あるいは宇宙が広がってゆく空間の広さとしての無限という概念などは、どんなに努力しても理解できないだろうが、生命の起源とその後の進化のメカニズムは、努力次第で理解できる範囲内にありそうである。しかし生命の誕生や進化の舞台となった地球も、ビッグバンの結果として生まれたのだから、この星で起きた「悲の器」の出現も、「天の決めたこと」つまり天命として諦めるしかない。世界中のすべての人が「悲の器」として生まれたことを自覚して諦めた時、初めて世界に本当の平和が訪れるのではないだろうか。

コンブはなぜ海の中でダシが出ないのか

二〇〇一年から翌年にかけて、コメディアンコンビが唱う「なんでだろう」で始まる歌が人気を呼んだ。中でも「コンブが海の中でダシが出ないのなんでだろう」という文句が、多くの人の関心の的になったらしく、私も何人かからその解答を求められた。

干して製品になった昆布は水に浸ただけでダシが出る。昆布のダシの主成分はアミノ酸の一種のグルタミン酸なのだが、アミノ酸はタンパク質の構成要素であり、光合成で生成した炭水化物に窒素が加わって合成された貴重な有機物である。海底に生えているコンブから貴重な成分がどんどん溶け出していたら生きていられるはずがない。だから海底に生えているコンブは、海水に浸っているけれど、ダシが出るわけではない。ただそれは「な

んでだろう」となるのだが、この疑問に対しては、「生きているから」と答えればよい。つまりこの一見ふざけたような寄席での笑いの種になる疑問は、「生きているとはどういうことか」を問うているのである。

「生きているから」は正解なのだが、「では生きているとなぜダシが出ないのか」という、新たな疑問が生ずる。

紅茶などに角砂糖を入れると、かき回さなくても、いつの間にか消えてしまう。「そんなことはあたりまえ」と誰でも思うが、自然界の現象はさまざまな法則に従って起きている。ティーカップの中で角砂糖が消えたのは、固体の状態の砂糖が水に溶けたためだが、このような場合「液体に溶ける成分は濃い方からうすい方へ移動してゆく」という法則が働いている、ということまで意識する人はそれほど多くないだろう。

「濃い方からうすい方へ動く」というのは、「すべり台のような勾配のある面（斜面）の上の方に置いた物体は下へ向かって動く」と同じように、自然の法則に従った現象ということで、「濃度勾配に従って移動する」と表現される。つまりティーカップの中の紅茶が、角砂糖の沈んでいた場所より離れた部分でも甘くなるのは、物体が上から下へ落ちるのと同じような現象であるというわけである。

水などの液体の中で溶けている物質が濃い方からうすい方へ移動するのが、自然の法則に従った現象であるのなら、海水という液体に漬かっているコンブの体内に濃く含まれているはずの成分が海水の方へ溶け出さないのは、ますます「なんでだろう」と思えてしまう。その答えの「生きているから」を少し詳しく表現すると、「生きた細胞の膜が防いでいるから」ということになる。

私達を含むほとんどすべての生物の体は細胞というマイクロな袋の集まりなのだが、細胞という袋の膜は、外にある必要な物質は通すが、不必要な物質は通さず、また細胞の中で生じた不要な物質を外へ向かって通過させる、という非常に不思議な性質を持っている。そして驚くほどに不思議なのは、外にはあるか無いかほとんどわからないほどうすくしか存在していない物質を、細胞の膜は内側へどんどん通過させて、細胞内にたまるようにしてしまうことである。

コンブはヨード（沃素）を沢山含んでいる。そしてワカメやヒジキは、カルシウムや鉄が豊富なために、日本人にとって大変貴重な食材とされてきたのだが、海水中には、ヨードもカルシウムも鉄もごくごくうすくしか含まれていない。海水中にごくごくうすく溶けている成分を海藻が多量に含んでいるのは、それらの成分がうすい海水から、細胞の膜を通過して、濃い細胞内へ移動し続けた、ということの意味している。

本来なら液体の中で物質は「濃度勾配に従って移動する」つまり濃い方からうすい方へ移動するのだが、生きた細胞の膜の内外では、その反対の「濃度勾配に逆らった移動」が起きているということになる。

勾配に逆らうとは、放っておけば斜面をすべり落ちてしまうはずの物体を逆に押し上げる、という意味であり、そのためにはエネルギーが必要である。このことは、自動車が坂

を登る時にガソリンを余計に消費するということから理解できるだろう。コンブやワカメやヒジキの細胞の膜の内外で起きているヨードやカルシウムや鉄の「濃度勾配に逆らった移動」にも、エネルギーは使われている。ヨードやカルシウムや鉄を多量に含むことがコンブやワカメやヒジキにとってどのような意味があるのかということは、残念ながら謎のままなのだが、これらの海藻にとって、ミネラルの豊かな食材であるということは、海中で生きていた証しなのである。

乾燥したコンブ一〇〇グラムにはヨードが〇・三グラム近く含まれている。これを生きたコンブ一キログラムあたりにすると、〇・一から〇・二グラムぐらいになるのだが、海水中には一リットル（約一キログラム）あたり〇・〇〇〇〇四グラムほどしか含まれていない。これらの数値から、生きたコンブの細胞（繊維質の細胞壁を除く）の中には、海水の一万倍以上の濃さでヨードが含まれている、とみなすことができる。コンブの細胞の膜は、ヨードを海水中から一万倍以上の濃さまで細胞の中に押し込むという能力を持っているのだから、細胞の中から貴重な成分が海水中へ出て行くのを防ぐなど「朝めし前」なのである。

「カツオはなぜ海の中でダシが出ないのか」という話も、かつてテレビに登場したことがあるが、やはり生きているからである。死ぬと細胞の膜はエネルギーを使えないので、「濃度勾配に逆らった仕事」ができなくなり、死後の「自己消化」で生じた物質を含む細胞内の成分が膜を素通りしてしまい、「ダシが出る」ということになる。

私達の体の細胞の膜も、生きているうちは「濃度勾配に逆らった仕事」をしている。「勾配に逆らう」とは、斜面をすべり落ちてしまうはずの物体を止めたり逆に押し上げたりすることなので、生きているということは、いつも重いものを持ち上げているのと同じである。徳川家康は、「人の一生は重荷を背負って歩み続けるようなものだ」と言ったと伝えられるが、生きていることの本質を言い当てたと言えるだろう。

すべての生物は、死ぬまで重荷を背負い続けなければならない存在として生まれるわけだが、そのことを意識して「辛い」と思ったりする生物はヒトだけである。そのため、シャカは「人生は苦である」と断定したのだが、ほとんどの人はそれに気付かないまま、新たな「悲の器」を産んでしまう。事の重大さに気付くのは、シャカのような天才でもない限り、子育ても終わった老後である。

「悲の器」は人類が滅亡しない限り、今後も誕生し続けるのだが、子が親も環境も選べないまま受動的に生まれるということは、他のすべての生物と変わらない。

今も世界の各地で悲惨な生活を強いられている幼い「悲の器」達や、今後も生まれ続ける未来の「悲の器」達のために、人生の残された部分を捧げることこそが、余生に入った者の義務であり、また最高の生き甲斐なのではないだろうか。

おわりに

伊豆の海辺に住み好きな研究に専念するという生活を三十四年間も続けたあと、今度は

南三陸の海辺に志津川町（現・南三陸町）が用意してくれた研究所で一層気ままな生活を始めて八年（二〇〇八年現在）になる。

私は世界中で一番の幸せ者であり、生まれ変わることがあるとすれば、また同じ人生を歩みたいなどと思ったりするのだが、最近は、もしかしたら世界中で最も不幸な人間かもしれぬとも思うようになった。

我が子供達が幼かった頃は、自由な研究が中心の仕事の合間の私の関心は、専ら子供達に向いていたのだが、彼等が成人に達した頃からは、研究以外にも使える自由な時間が多くなった。おかげで著書も何冊か出版できたのだが、いつのまにか世界中の子供達のことを気になり出し、悲惨な境遇にある大勢の子達の存在を知った。そして何もできない自分の非力さを嘆く毎日となり、これほど悲しみに満ちた世界の中での個人的な幸せは本当の幸せとは言えない、ということに気付いた。

世界中に満ちあふれるほどの悲しみや地球環境悪化への不安は、すべて全人類のごく一部を占める支配層のエゴイズムと、その他大勢の人達の無関心に起因している。そのどちらも、「私達はなぜ生きているのか」という疑問を解かないまま一生を過ごしたり、誤った解答を信じたりする人がほとんどである、ということに遠因があると言える。本書は、その疑問への私なりの解答を含め、半世紀にわたる気ままな研究生活で私の「器」に積み重なったものを吐露し、世に問いたいとの思いから書かせていただいた。この先私にはどれだけの余生が残されているか知る由もないが、本書を執筆させていただきながら得た結論どおり、ユズリハの老葉にならった生活を送りたいと思う。（完）

6. 事務局便り：

- この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。
- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない環境の方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひろも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。

- 本会への寄付をお寄せください。寄付も会費も同じ銀行口座「ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会」へお送りください。なお、送金される場合は、送金の内容について事務局にお知らせ下さい。

7. 編集後記

20 回にわたってお届けしてきました横浜康継さんのエッセイ「自分探しの自然観察ー私たちはなぜ生きている？」は、最終回を迎えました。住みにくい世の中で私たちの生きる意味を問い直すという重い思いを横浜さんの楽しい筆に乗せて書いていただきました。横浜さんがこの原稿を書かれたのは数年前だったので、少し現状にそぐわない点もありましたが、あの時点での横浜さんの思いという意味で読んでいただければ幸いです。横浜さん、どうもありがとうございました。なお、横浜さんからは、またあらためて別のエッセイなどの原稿をいただいております。順次、ご紹介していきますので、ご期待下さい（宏）

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円／年、団体 20,000 円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

メールマガジン『うみひろも』第 54 号 2010 年 2 月 1 日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町 23-1 グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501 メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：ゆうちょ銀行 口座番号：10610-6673021 海の生き物を守る会

